

「ゼベダイの息子たち」

マルコの福音書 10:35～45

はじめに

今回は、イエシュアがいよいよエルサレムに向かって歩き出され、その途上で弟子たちを呼び、これから自分が祭司長、律法学者たちによって、そして異邦人によって殺されること、すなわち十字架の死について告げられ、さらにその死から三日後には、よみがえられることをも予告されました。これに対する弟子たちの反応が今日の内容となっています。彼らの心にはすでに恐れと驚きがあり（マルコ 10:32）、それは現状が把握できない、今一体何が起こっているのかが理解できない、つまり神のご計画が見えないこと、霊的に盲目、眠っている状態によるものでした。しかしだからと言って、イエシュアの、神のご計画が滞ったり、妨げられたりするようなことはありません。いやむしろ、神のご計画とは常に人の理解を超えたところで、人の認識や常識を超えた形で進められていくものなのです。詩篇の中にこのような御言葉があります。

詩篇【新改訳 2017】

127:1 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。

127:2 あなたがたが早く起き、遅く休み、労苦の糧を食べたとしても、それはむなしい。実に、主は愛する者に眠りを与えてくださる（別訳：眠っている間に、このように備えてくださる）。

このように、神である主は、ご自分の計画を、人の手に頼らず、ただご自身の御手によって成し遂げる「備えてくださる」ために、あえて人に「眠りを与えてくださる」御方であるということです。つまり弟子たちがイエシュアの御言葉を理解できない、これから起ころうとする神のご計画が見えないのは、彼らの愚かさや罪深さによるものではなく、このような神のご性質によるものなのです。ですから今日の箇所は、その弟子たちの愚かさや罪深さを、私たちが上から見下ろすようにして、彼らを批判、非難するためのものではありません。とかく私たちは自分が知っていることを知らない人がいると、その人を見下す傾向にあります。「知識は人を高ぶらせる（Iコリント 8:1）」とあるとおりです。「自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです（Iコリント 8:2）」ともありますから気を付けましょう。

ともかく神のご計画は、人が「眠っている間に…備えてくださる」ものです。つまり、たとえ弟子たちがイエシュアの御言葉、ご計画を理解していなくても、彼らの「眠っている間に」その言動の中に神のご計画は表わされていると考えられます。ですからイエシュアの御言葉と同様に、今日の箇所に記された弟子たちの言動についても目を留めて、聖書の御言葉として捉え、読み進んでまいりたいと思います。

1. 栄光

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:35 ゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちが願うことをかなえていただきたいのです。」

10:36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」

10:37 彼らは言った。「あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください。」

10:38 しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」

10:39 彼らは「できます」と言った。そこで、イエスは言われた。「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることとなります。」

10:40 しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。それは備えられた人たちに与えられるのです。」

10:41 ほかの十人はこれを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた。

「ゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネ」が登場します。大胆にも彼らはイエシュアが栄光の御座に着かれるその時、自分たちをイエシュアの右と左の最も近くに座る者としてくださいと直談判してきたのです。彼らがなぜそのようなことを言い出したのか、それを考える前に一つ興味深いことがあります。それは最初に述べたように、この出来事はイエシュアが殺され、そして三日後によみがえるという予告がなされたその直後のものだということです。つまりヤコブとヨハネはこれをイエシュアが「栄光をお受けになるとき」と理解した、ということです。恐れと驚きの中にあつた弟子たちの中で、彼らだけはこれをそのように理解したのです。「栄光」という意味のヘブル語カーヴオード(קָבוֹד)は本来、父の持つすべての富、財産(創世記 31:1)という意味であり、イエシュアは十字架の死によって、その御父である神からのすべての栄誉、栄光をお受けになりました。こう記されているとおりです。

ピリピ人への手紙【新改訳 2017】

2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、

2:8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。

2. 右と左

イエシュアの十字架の死と復活、これをイエシュアが御父からの「栄光をお受けになるとき」であるという、見事な理解を示したヤコブとヨハネでしたが、続いて「一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください」とイエシュアに願い求めたとあります。文脈的には、彼らがこのようなことを言い出したのは、彼らの偉くなりたい、人の先頭に立つような存在になりたいという欲から出たものであると考えられます。つまり十字架と復活を神の栄光と言い表した彼らでしたが、実際には神のことではなく人のこと、自分のことばかりを考えていて、神のご計画を理解していなかったということです。しかし彼らが分かっていない、理解していない、見えていないからといって、間違ったことを言っているとは限らな

いのです。最初に述べたように、靈的に眠っている者の中にこそ神のご計画は表されます。ですから一見戯言とも思えるようなヤコブとヨハネのこの言い分にも目を留める必要があります。

彼らは自分たちをイエシュアの「右と左に」と言いました。ヘブル語の「右」ヤーマン(ימין)と「左」セモール(שמאל)の最初の言及について見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

13:8 アブラムはロトに言った。「私とあなたの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちの間に、争いがないようにしましょう。私たちは親類同士なのだから。

13:9 全地はあなたの前にあるではないか。私から別れて行って欲しくないか。あなたが左なら、私は右に行こう。あなたが右なら、私は左に行こう。

13:12 アブラムはカナンに地に住んだ。一方、ロトは低地の町々に住み、ソドムに天幕を移した。

13:13 ところが、ソドムの人々は邪悪で、【主】に対して甚だしく罪深い者たちであった。

イスラエルの父祖アブラムが、親類のロトと別れて住むようになったという出来事の中に聖書で最初のヤーマンとセモールがあります。ヘブル語では親類も兄弟も、また同胞も同じアーハ(אח)と言います。ですからヤコブとヨハネの姿が彼らとぴったりと重なるのです。ロトはアブラムの家から分かれ、罪の町ソドムに住む者となりました。やがてこの町は滅ぼされますが、ロトは救い出されます。ですから彼は私たち異邦人の教会の「型」と見ることができます。つまりこのアブラムとロトは、ユダヤ人とも呼ばれるイスラエルと私たち教会の「型」であり、同様にここでのヤコブとヨハネにもそれが表わされていると考えられます。彼らはイエシュアの十字架と復活を「栄光をお受けになるとき」と言いましたが、やがてこの地上に、メシアであるイエシュアを王とする「神の国、千年王国、メシア王国」が建てられることこそがまさにそれなのです。その日その時イスラエルと教会はイエシュアとともに世界を治めるようになります。自己中全開の、靈的盲目の状態で放たれたヤコブとヨハネの、一見戯言とも思える「あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください」という言葉ですが、ここに神のご計画が見事に表されているのです。それを証拠にイエシュアはこれを真っ向から否定なされず、むしろ逆に「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることとなります」と、彼らの求めに対し肯定的とも取れる言葉を返しておられます。ではイエシュアのこの答えとしての御言葉にはどのような意味が込められているのでしょうか。

3. 飲む、受ける

イエシュアはヤコブとヨハネに対し「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受ける」と言われました。ここには「飲む」という意味のシャーター(שתה)と、また「浸す」という意味のターヴァル(טבל)が「わたしが飲む…を飲み」「わたしが受ける…を受ける」というふうになんどもそれぞれ二回ずつ使われ強調されています。それぞれの最初の言及について見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

9:20 さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めた。

9:21 彼はぶどう酒を飲んで酔い、自分の天幕の中で裸になった。

これは大洪水の後のノアについてのものですが、「ぶどう酒を飲んで酔い」ここに聖書で最初のシャーターがあります。そして彼は「天幕の中で裸になった」とあります。裸になるとは、自分のありのままを隠さずに現わす、明らかにするという行為です。そして彼は自分の天幕、自分の家の中でそれを行いました。ですからイエシュアが言われた「わたしが飲む杯」とは、ご自分の家である神の幕屋、神殿の中でご自身を現わす、という行為を指し示していると考えられ、それは「神の国」におけるエルサレムの神殿にイエシュアが来られ、メシアとしてのご自身を表される、という神のご計画を指し示した御言葉であると考えられます。また最初の人アダムとエバは、造られた当初はお互い裸でしたが、恥ずかしいとは思わなかった（創世記 2:25）とあり、裸とは親密な関係、交わりを表し、さらに神の御前に罪のない状態（創世記 3:10）をも指す言葉ですから、ヤコブとヨハネに言われた「わたしが飲む杯を飲み」とは、イエシュアとの親密な関係、交わりを持つことができる、罪赦された、もはや罪のない者となることを指し示したたとえであると考えられます。つまり彼らを「型」とするイスラエルと教会が「神の国」においてそのような者となるということです。

そして「バプテスマを受ける」という箇所に使われたターヴァルについてですが、これは本来、水に浸す、つけるのではなく「服を血に浸す」という意味を持った言葉です（創世記 37:31）。この血に染まった服を着る御方とは誰でしょう。それは地上再臨されるイエシュアです。こう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

「バプテスマを受ける」とは普通、水による洗礼というイメージですが、このようにヘブル語の視点では「血に染まった衣をまとい」神に敵対する者を打ち滅ぼすために再臨される「王の王、主の主」であるメシア、イエシュアを指し示します。またこの御方に付き従う「天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て」ともありますが、これは世の罪を取り除く神の子羊の血、イエシュアの血、その十字架で流された血によって、これにターヴァル、浸して洗いきよめられた亜麻布です（黙示録 7:14）。このようにヤコブとヨハネに告げられた「わたしが受けるバプテスマを受ける」とは、上記の神のご計画としての預言を指し示したものであると考えられます。

このように、ヤコブとヨハネに対するイエシュアの御言葉には、ご自分と、そしてイスラエルと教会についての神のご計画がたとえ「型」として表されているのです。そしてこれはすべてイエシュアが「わた

しが許すことではありません。それは備えられた人たちに与えられるのです」と言われたように、御父である神がご計画され、まさに初めから「備えられた」ものなのです。そして御子イエシュアはそれに全く同意し、完全に一つ心でこれに従っておられるのです。ちなみにこのヤコブとヨハネは「ゼベダイ」の子らであることがあえて記されていますが、これにも意味があると思われます。この名は「授ける、与える、賦与する」という意味のザーヴァド(זבד)に由来するものと考えられ、この言葉は本来、「神の賜物によってともに住む(創世記 30:20)」という出来事が指し示されているのです。まさにヤコブとヨハネに表されたイスラエルと教会は「神の国」においてそのような存在と言えます。

しかし一方、この神の御心、選び、ご計画を、神に敵対するもの、信じないもの、受け入れないものは、当然これを聞いても快く思わず、腹を立て怒ります。それがヤコブとヨハネ以外の十人の弟子たちが「これを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた」という記述には表されていると考えられます。

4. 仕える

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。

10:43 しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。

10:44 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。

10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

ヤコブとヨハネをイスラエルと教会の「型」たえとして神のご計画を言い表されたイエシュアですが、実際の彼らのうちにある「偉くなりたい」という欲についてもここで言及しておられます。そして「神の国」において「偉くなりたい…先頭に立ちたいと思う者」は、「仕える者」になることを示しておられます。「仕える」という意味のシャーラト(שרט)は本来このように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

39:2 【主】がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。

39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。

39:4 それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

39:5 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。

39:6 主人はヨセフの手に全財産を任せ、自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わなかった。

これはイスラエルの子ヨセフが、ポティファルというエジプト人に「**仕えることになった**」という出来事で、ここに聖書で最初のシャーラトがあります。この結果ポティファルの家は主の祝福を受けます。このように、シャーラトとは本来、**神の祝福に与らせる**という意味があると考えられます。そしてまた主人であるポティファルは「**自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わなかった**」ともあり、これは直訳では「彼が食べているパンのことは知らなかった」となります。ヨセフがシャーラト「**仕えることになった**」ことでポティファルはそのような者となったのです。これらの事実は「神の国」の民の「型」であると言えます。すなわち「神の国」とはイスラエルによって民を神の祝福に与らせる世界だからです。そしてその祝福に与る者たちはみな、**神のお与えになるパンである神の御言葉、またその体現者、まさに生ける神の御言葉であるイエシュアのこと以外には何も関わらない、知らない者となる**、ということです。イエシュアの言われた「**仕える者になりなさい**」という御言葉には、このような神のご計画が表されていると考えられます。

イエシュアはヤコブとヨハネに向かって「**あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません**」と言われましたが、実は神のご計画は、人のある意味において何も理解しない、何も分かっていない、何も知らない者にするというものなのです。それはつまり神の御言葉の他は、イエシュアのこと以外には何も知らない者となるということです。それはもちろん神を知る、イエシュアを知ることなのですが、このような言い方をするにはわけがあります。なぜなら「知る、理解する、分かる」という意味のヘブル語ヤード(**יָדַע**)は本来、「サタンの声に耳を傾け、自分の目で善悪を**知る**（創世記 3:5）見分ける」という行為を指し示す言葉だからです。私たちは本来、神の御声、御言葉に耳を傾け、その教えと戒めに聞き従わなければならないのに、今は絶えずサタンのもたらす偽りと、また何より人間的な、自己中心的な考えの影響を日々強く受け続けています。

しかしやがて「神の国」では私たちはその本来の状態である、ただ神の御言葉に聞き従う者とされ、それ以外は「何も知らない」者、つまり罪を犯すことを「知らない」者とされるのです。

エレミヤ書【新改訳 2017】

3:17 そのとき、エルサレムは【主】の御座と呼ばれ、万国の民はこの御座、【主】の名のあるエルサレムに集められ、彼らは二度と頑なな悪い心のままに歩むことはない。

このように、「万国の民」すべての人が主イエシュアに聞き従い「**頑なな悪い心**」に従うことのない世界、それが「神の国、千年王国、メシア王国」と呼ばれる神のご計画の成就としての私たち人の姿です。主なるイエシュアがこれを実現されます。その日は近いのです。待ち望みましょう、聖霊の助けとともに。